

「離別と死別」の伏線は『現実性の問題』においてどう回収されたのか

入不二基義（青山学院大学）

「離別と死別」の話は、拙著『現実性の問題』（筑摩書房、2020年）の冒頭部分に位置する、私が小学生だった頃のエピソードである。その話は、こどもと大人のやり取りで構成されていて、現実性と可能性についてのこどもと大人の両視点の交代を提示している。拙著は、この「はじめに」を導入部として、現実性の問題をめぐる考察をスタートさせる。続く第一章では、「円環モデル」の上に現実性と可能性を位置づけ、第二章では現実性の4つの水準の絡み合いを考察する。しかし、その第一章でも第二章でも、またその後続く章でも、冒頭のエピソードが再び取り上げられることはない。それでは、「離別と死別」のエピソードを「伏線」とした場合に、その「回収」は、拙著の考察を通じてどのように行われたことになるのだろうか。その「回収」は本の中で明示的には語られていない。そこで、本発表では第一章と第二章を経た視点から「離別と死別」を振り返り、「こどもの現実」を「超-こどもの現実」へと回収することを試みる。